

第六章 夕霧の物語 五節舞姫への恋

[第一段 惟光の娘、五節舞姫となる]

大殿には(源氏の太政大臣におかれては)、今年、*五節(ごせち、新嘗祭の舞姫を)たてまつりたまふ(御用立てる役に就きなさいませ)。何ばかりの御いそぎならねど(様式が定まっているので、特に趣向のある準備ではないが)、童女の装束など(舞姫の付き従う童女の衣装など)、近うなりぬとて(祭日が近づいたので)、急ぎせさせたまふ(急いで仕立てさせなさいませ)。*「五節」は<大嘗祭(だいじゃうさい、即位後初の新嘗祭)ないし新嘗祭(にひなめまつり、しんじゃうさい、新穀を神に供える祭り)に奉納する舞姫による祝い舞。>または<その舞姫>、と古語辞典にある。祭事の執行は神職たる天皇の職分、式次第は中務省が司るのだろうが、五節は祝典だろうし、宴会を開いて各勢力の結集と和合を図って、祭典全体を盛り上げるのは、政治家たる大殿の主要な役務には違いない。注には<新嘗祭の五節。十一月の中の丑、寅、卯、辰の日に行われる。舞姫を公卿から二人、殿上人・受領から二人差し出す。源氏は公卿として惟光の娘を差し出した。なお大嘗祭では五人の舞姫を差し出す。>とある。

*東の院には(東院の花散里夫人は)、参りの夜の人びとの(舞姫が参内する夜に付き添う女房たちの)装束せさせたまふ(衣装を作らせなさいませ)。殿には(正夫人は)、おほかたのことども(全体の用意に遅れがないように不足を補い)、中宮よりも(斎宮中宮からは)、童(小間使いの子供や)、下仕への料など(手伝い女房たちの分の衣服など)、*えならでたてまつれたまへり(ただならず贈り下さりなさいませ)。*「ひんがしのみん」は與謝野晶子訳文に「東の院の花散里夫人」とあり、分かり易いので従う。*「えならず」は<並でない、すばらしい>とあるが、「しもつかへのれう」が<豪華>では奇怪いので、量が<多い>のか、普通は無いか、普通は無いことだが<特に>なのか、ざっとくだならず。

*過ぎにし年(去年は藤壺中宮崩御による哀悼謹慎で)、五節など止まれりしが(五節などの祝儀は中止となったが)、さうごうしかりし積もり取り添へ(今年はその自制した分まで上乘せして)、上人(うへびと、殿上役人)の心地も(の気分も)、常よりもはなやかに思ふべかめる年なれば(いつもより華やかに思うであろう年なので)、所々挑みて(舞姫を出す家々は競って)、いとみじくよろづを尽くしたまふ聞こえあり(相当に気張って万全を尽くしなさいませ)。*注に<去年は藤壺中宮の崩御により諒闇(りやうあん)のため停止。>とある。藤壺中宮崩御は昨年三月。

*按察使大納言(あぜちのだいなごん、正四位上)、左衛門督(さゑもんのかみ、従四位下)、上の五節には(その他に殿上人の舞姫の割り当てとしては)、良清(よしきよ)、今は近江守(あふみのかみ)にて左中弁(さちゅうべん、正五位上の官位相当)なるなむ(なる者が)、たてまつりける(人選を仰せ付かって舞姫を御用立てなさいませ)。*注に「按察使大納言」は<雲居雁の母が再婚した相手。公卿分の舞姫を差し出す。>とある。大納言は正三位相当とあるが、按察使大納言は参議くらいの正四位上かと見当する。「左衛門督」は<内大臣の弟か。前に内大臣の異母兄弟「左兵衛督」の異文に「左衛門督」とあった。同じく公卿分の舞姫を差し出す。『集成』は「この年は、太政大臣である源氏を加えて、特に公卿から三人出したことになる」。『完訳』は「以上二家は公卿」と注す。>とある。律令で定められた官位相当制に於いて、武官の内、近衛大将の身分は従三位と別格の貴人だが、衛門督は正五位上で兵衛督は従五位上と序列されている。同じ五位でも違いは歴然と言うわけだ。但し、公卿は参議(四位)以上、とのこと。

皆止めさせたまひて(今年の舞姫はそのまま続いて)、宮仕へすべく(高位女官として宮仕えするようにとの)、仰せ言*ことなる年なれば(御達しが特にある年なので)、女を(むすめを、担当役人自身の愛娘を)おのおのたてまつりたまふ(各々選び出しなさるのです)。 *「殊なる」は注にく『完訳』は「大嘗祭の舞姫には叙位があるが、新嘗祭にはなく舞姫のなり手が少なかったという。ここは勅命があり、大嘗祭に准ずるほど盛大」と注す。>とある。舞姫を仕立てるのに、担当官は衣装その他の物入りで相当の負担を強いられた、ということか。それが、4回ぐらい舞を披露して祝賀の賑やかしだけで終わったのでは割に合わない。でも、その後の高給が見込めるなら意味がある投資だ、ということか。

殿の舞姫は(源氏大臣が御用立てる舞姫は)、*惟光朝臣の(これみつのあそんの、例の家来の惟光という)、津守(つのかみ、摂津国守)にて左京大夫(さきょうのだいぶ、正五位上)かけたるが女(兼任している者の娘で)、容貌などいとをかしげなる聞こえあるを召す(姿形がとても美しいと評判の高いものを選びなさいます)。 *「朝臣」は貴人男子に対する敬称、とある。「惟光朝臣」はこれまでの経緯からして<家来の惟光>ぐらいの感じ。「津守」といっても蔵人の昇進職で畿内でもあり、惟光は赴任せずに在京していたのだろう。「左京大夫」は左京職(さきょうしき、左京区警察)の長官、とある。警察の管理職は実務や実権ではなく身分を示す。正五位上相当、とのこと。なお、注にく『完訳』は「源氏の世話する舞姫。殿上受領分として、惟光を後援する形か」と注す。>とあるが、源氏大臣の口利き分として惟光の娘を舞姫に立てるのだから、当然に受領分ではなく公卿分。前出の注にあったように、この年は「特に公卿から三人出した」のであり、例年に無く派手な五節が企画されたに違いない。恐らく今回は、源氏太政大臣と藤原氏内大臣による新体制の権勢を示そうとした、のだろう。また、そう読まないで、次の文に繋がらない。

からいことに思ひたれど(惟光は公卿分の舞姫としては、自分の娘だけが身分が低いことを苦に思ったが)、

「*大納言の(たかだか三位の大納言殿が)、外腹(ほかばら、妾腹)の女をたてまつらるなるに(の娘を舞姫に仕立てなさろうということなのだから)、朝臣の(一位たる太政大臣の腹心なる私が)いつき女出だし立てたらむ(愛娘を出して舞姫に仕立てようとするに)、何の恥かあるべき(何の引け目があるか)」 *此処の構文は「AなるにBたらむ」の対比だ。Aの「外腹」に対応するBは「朝臣」だから、この「朝臣」は<腹心>と読まないで洒落にならない。というか、「朝臣」の語が<腹心>の意で<外腹>に優るもの>として読める事が、この文の要諦だ。では、Aの「大納言」に対応するのは何かと言えば、同じ担当官という立場で対比できるBは「殿(源氏大臣)」ということになるが、「殿」はこの文が朝臣たる惟光の自問自答なるがゆえに、省略というか伏せられている。なお、「朝臣」を自称するのは三位以上と古語辞典にあるが、それは公然とであり、此処は心中の自称ゆえに、この軽口めいた言い回しが成立している。

と*苛めば(と反感も覚えて)、*わびて(娘の立場に不安はあったが)、同じくは宮仕へやがてせさすべく思ひおきてたり(他の公卿の娘と同じように宮仕えをそのままさせることと決心していたのです)。 *「さいなむ」は<責め立てる>とある。また、注は上の括弧文を<『集成』『新大系』は、源氏の詞。『完訳』『セレクション』は、人々の詞とする。>としてある。が、是では丸っと不可解だ。先ず注だが、「さいなむ」に「給ふ」の敬語表現が無いから、括弧文が<源氏の詞>となることは有り得ない。というか、括弧文は語りの運びからしても、その内容からしても、惟光の心中文なので、<人々の詞>という曲解も「さいなむ」に引きずられた結果なのだろう。だから、やはり「さいなむ」は難解だ。そこで、此処は文意から「さいなむ」を逆に定義してみる。と、此処の文意は括弧文の内容の自問文を「さいなむ」のだから、妥当な意味は<熟考する>とか<再考する>

または<反論する>あたりだろう。と、これは「苛む」なのではなく、「さ(再び)+いなむ(辞む、否定する)」なのだ
と解釈出来るので、更に「からいこと」を受けて<反感、反発する>と言い換えた。 *「わぶ」は<嘆く、心細く過
す、困る>などとあるが、惟光の心配事は<娘の(将来の)立場>なのだろう。

舞習はし(まひならはし、踊りの稽古)などは、里にて(自宅に於いて)いとよう仕立てて(しっ
かり覚えさせて)、かしづきなど(介添役などの)、親しう身に添ふべきは(直接身の回りの世話を
する女房だけは)、いみじう選り整へて(数名を選び揃えて)、*その日の*夕つけて参らせたり(惟
光は娘の舞姫を五節を舞う当日の夕方になって二条院に参上させました)。 *「その日」は注に<『集
成』は「当日(丑の日)の夕方に。宮中に参入するのは夜」。『完訳』は「当日の夕方になって二条院に参上させ
た」と注す。>とある。夜と夕方の時間間隔が良く分からないので、この文の時間感覚が良く掴めない。ただ、旧
暦11月半ばは冬至で、一年で一番日が短い季節だから、夕方は4時くらいだろうか。 *「夕つく」は古語辞典に「ゆ
ふづく」とあり、<夕方になる>と説明される。

*殿にも(その日は二条院の方でも)、*御方々の童女(主院と東院それぞれの夫人に仕える童女
たちが)、下仕へのすぐれたるをと(手伝いの上手な者をと)、御覧じ比べ(殿に見比べて貰って)、
選り出でらるる心地どもは(選り出されれば祝典の会場に出掛けられるかもしれないと思って)、
ほどほどにつけて(それぞれの年齢ごとに)、いと*おもだたしげなり(とても目立ちたがっている
ようでした)。 *「殿にも」の「にも」は<~の方に於いても>で、舞姫を迎えて一段と賑わう二条院の様子が描か
れる。 *「御方々」は紫の上と花散里。 *「おもだたし」は「面立たし」で<光榮に思う>と、辞書にある。が、「えり
いでられし」ではなく「えりいでらるる」なのだから、「おもだたしげ」は<光榮に思って居そうに>なのではなく<光
榮に思いたがって=選ばれようと目立ちたがって>である。

*御前に召して(おまへにめして、帝の御前に召されて)御覧ぜむうちならしに(御覧頂く卯の日
の夜の童女御覧の予行として)、御前を渡らせてと定めたまふ(源氏大臣の御前を歩かせて童女を
選りなさいます)。捨つべうもあらず(劣るような者は居ないので)、とりどりなる童女の様体(と
りどりに優れた立ち姿や)、容貌を思しわづらひて(顔立ちを選び悩みなさって)、 *注に<帝が御
前に召して御覧になる予行演習として源氏の御前を歩かせるという意。>とある。確かに分かり難い言い方だ。こ
の紛らわしさは当時の人も自覚した筈で、「主上」や「殿」を言い添えても良さそうに思うが、書いた途端に客体化す
る安っぽさは確かに想像出来て、言わないから伝わる思いの程、のようなものの空気感を味わうべきかとも思う。
でも、やはりそれでも、この雲上人の内輪意識を私ごときが共有出来る筈も無い。また、古語辞典に「五節」が<丑
の日に「帳台の試み(ちやうだいのこころみ、舞姫御前舞)」、寅の日に「殿上の淵酔(てんじやうのゑんずい、祝宴)」
と夜に「御前の試み(ごぜんのこころみ、舞姫御前舞)」、卯の日に「童女御覧(わらはごらん、童舞)」、辰の日に「豊
明かりの節会(とよのあかりのせちゑ、天皇試食)」、など種々の儀が行われた。>と詳しいので、「童女御覧」を補語
した。とはいえ私には、その実態たるや全く分からない。

「今一所の料を(もう一組の小間使い連中を)、これよりたてまつらばや(この中から取り揃え
てやるか)」

など笑ひたまふ(などと殿は笑いなさいます)。ただもてなし用意によりてぞ選りに入りける
(結局、ちょっとした手伝いの手際の出来次第で会場入りする者は選ばれたのです)。

[第二段 夕霧、五節舞姫を恋慕]

大学の君(大学生の若君は)、胸のみふたがりて(気が塞がるばかりで)、*物なども見入れられず(食欲も無く)、屈じいたくて(気落ちがひどくて)、書も読まで眺め臥したまへるを(漢籍も読めずに呆然と横になっていらしたが)、心もや慰むと*立ち出でて(何とか気分を晴らそうと勉強部屋がある東院を抜け出して)、*紛れありきたまふ(この賑わしい二条の主院内を人々に紛れて見回り歩いていらっしやいます)。*此处の「もの」は訳文にあるように<飲食物>が良さそうだ。「見入る」は<関心が向く>だから、「物など見入る」で<食欲が湧く>。*「立ち出づ」は<立ち去る>の語感だから、建物の<外へ出る>という描写なのだろう。建物内で部屋を出るのなら「立つ」だけのような気がする。*「紛れ歩き給ふ」は注に<『集成』は「(二条の院内を)人々に入りまじってあちこち見てまわる」。『完訳』は「人目を避け物陰伝いに行く意」と注す。>とある。舞台は舞姫を迎える準備で賑わう二条院である。其処へ、東院の勉強部屋に閉じこもっていた若君が、童女たちが主院に向かう騒ぎを何事かと見に出てきた場面である。

さま(若君の姿)、容貌はめでたくをかしげにて(顔立ちが目立って素晴らしく)、静やかになまめいたまへれば(大人しげに優雅でいらっしやるので)、若き女房などは(本院の若女房たちは)、いとをかしと見たてまつる(非常に興味深く押し致します)。

*上の御方には(紫の上が御出でになる御部屋には)、御簾の前にだに(御簾の前ですら)、もの近うももてなしたまはず(源氏殿は若君を近付けようとはなさいません)。*注に<紫の上の御前をさす。『集成』は「主語は、源氏」。『完訳』は「源氏の、夕霧へのきびしいしつけ」と注す。>とある。此处で言う「御方」は「西の対」の事ではなくて、紫の上が<今現在居るお部屋>という事なのだろうか。二条院は正殿が客間である。明石の姫君がその一角を使っていたような記事もあったが、この日は舞姫を迎える特別な室礼に成っていたであろう、その正殿こそが舞台なのだ、と思う。

わが御心ならひ(殿は御自分の継母である故藤壺宮との情交という経験を)、いかに思すにかありけむ(どれほど忌まわしく御思いであったものか)、疎々しければ(若君と紫の上とは遠ざけられていて)、御達なども気遠きを(夫人の女房たちも若君に慣れ親しんでいなかったが)、今日はものの紛れに(今日は童選びの賑わいに紛れて)、入り立ちたまへるなめり(若君は正殿の御簾内まで立ち入ってしまいなさっていたようです)。

舞姫かしづき下ろして(舞姫を牛車から丁重にお迎えして)、*妻戸の間に屏風など立てて(南角の庇に屏風などで仕切った)、かりそめのしつらひなるに(仮部屋に案内してあったところを)、やをら寄りてのぞきたまへば(若君がそっと覗きなざると)、悩ましげにて添ひ臥したり(舞姫は疲れたように肘掛に体を預けて横になっていました)。*「つまど」は正殿の西側と東側の端(つま)の出入り口で、大事な客なら庭のある南正面に迎えるだろうから、「つまどのま」は南の角庇。東西は不明。

ただ、かの人御ほどと見えて(ちょうど恋しい姫君と同じ年恰好に見えて)、今すこしそびやかに(少し背が高く)、様体(やうだい、舞姫装束)などのことさらび(などで殊更着飾っていた所為か)、をかしきところはまさりてさへ見ゆ(美しさでは勝ってさえ見えます)。

暗ければ、こまかには見えねど(暗いので良くは見えないが)、ほどのいとよく思ひ出でらるるさまに(姫が恋しく思い出されるこの娘の姿に)、心移るとはなけれど(姫へのものと同じ恋心を

抱いたわけではなかったが)、ただにもあらで(興味はそそられて)、衣の裾を引き鳴らいたまふに(若君が娘の着物の裾を引いて衣擦れの音を立てなさんと)、何心もなく(舞姫の娘が何か分からず)、あやしと思ふに(変に思っている時に)、

「天にます豊岡姫の宮人も、わが心ざすしめを忘るな (和歌 21-07)

「いくら天女を気取っても、裾に消えないボクのシミ (意識 21-07)

*注に<夕霧から五節舞姫への贈歌。『集成』は「伊勢外宮の豊受大神であろう」。『完訳』は「天照大神」と注す。
「みてぐらは我がにはあらず天にます豊岡姫の宮のみてぐら」(拾遺集、五七九、神楽歌)を引く。>とある。この神楽歌については少しWeb検索したが深入りは難しそうなので遠慮する。ただ、奈良の廣瀬大社のサイトにあった「砂かけ祭り」のページが、何となく歌の原義を偲ばせて面白かった。「砂かけ祭り」は二月に行われる<田植え祭り>で豊作祈願と説明されていて、五節の感謝祭との違いはあるが、祈願でも感謝でも雨乞いの意味に変わりはない。ともかく、どうやら「あめにますとよをかひめ」は<天上の豊作を請負う女神>らしく、その感謝祭の舞姫に選ばれた娘は「みやびと」に違いないから、神事を司る以上は「しめ(注連縄)」で聖地に結界を張る事を「忘るな(忘れてはいけない)」という言い回しで洒落ながら、若君は舞姫に「キミは神職を気取っているみたいだけど、ボクはもうツバ吐けちゃったからね」と茶目っ気を見せたのだろう。

*乙女子が袖振る山の瑞垣の(キミが舞うずっと前からサ) *注に<和歌に添えた詞。「少女子が袖振る山の瑞垣の久しき世より思ひそめてき」(拾遺集雑恋、一二一〇、柿本人麿)を引く。>とある。「をとめご」は「をとめ(少女または処女)」に親しみを示す接尾語の「こ、ご」が付いたもの、だろう。此处で言う「をとめ」は当然に一人はこの舞姫であり、また同時に藤原の姫君も含意していて、此处に初めて巻題の「をとめ(乙女、少女)」の出典を見るのである。「袖振る」は<別れを惜しむ>または<踊りを舞う>と古語辞典にある。多分、袖の色柄で相手に合図を送る、または相手が印象を受ける、という事から基本的には好意を示す言い方なのだろう。「袖にする」は<断る、相手にしない>などだが、「袖振る」には<拒む>という意味は無さそう。ただし、「振る」には元々<払う、除ける>の意味があるから、「袖を振る」だと色々な意味は込められそう。ともあれ、此处で舞姫に「をとめごがそでふる」を若君が言う意味は<あなたが舞う>である。そして、「みづがきの」は<枕詞>とあり、<大和の布留の社の垣は年を経ているので「久し」に掛かる。>と古語辞典に説明されている。「やまとのふるのやしる」とは奈良県天理市布留町布留山の石上神宮(いそのかみじんぐう)であり、石上神宮が伊勢神宮(いせじんぐう、一説に古名は「磯宮(いそのかみ)」)と並ぶ記・紀に記された日本最古の二社の一つとされることから、古語辞典の説明の意味は<ずっと前から>という掛詞で「久し」を修辞する、という事ようだ。つまり、「ふるやまのみづがき」は石上神宮の石垣という事だから、若君がそう言った意味は<古来から在る→ずっと前からの事なのさ>である。ところで、拾遺集にあるとされるこの引歌だが、背景を知ろうと「そでふるやま」でWeb検索すると、拾遺集を差し置いて万葉集四巻の相聞 501 番の「未通女等之(をとめらが)袖振山乃(そでふるやまの)水垣之(みづがきの)久時従(ひさしきときゆ)憶寸吾者(おもひきわれは)」という相似の歌が参照歌としてヒットする。ところが更に、この参照歌には万葉集十一巻の寄物陳思 2415 番の「處女等乎(をとめらを)袖振山(そでふるやまの)水垣乃(みづがきの)久時由(ひさしきときゆ)念來吾等者(おもひきあらは)」が相似の参照歌として指摘される。なお、現代語では「をとめら」と言う複数に見えて<四人の巫女舞い>を想定しがちだが、此处の「ら」は「ご」と同様に親近感を込めた強調の接尾語で、そう言えば今でも「おいら」とかは偶に使うが、「ご」よりは「ら」の方が下卑た語感で、歌に於いては臨場感を出す工夫なのだろう。で、この両歌における「をとめ」は少なくとも情景詠みでは<乙な女→年少の可愛い娘>を意味し、後付の<石上神社>の巫女を指すものではない。それが、「をとめら**が**袖振る」なら相手側も思っているから相聞で、「を

とめらを袖振る」なら自分側の思いだから寄物、となっているようで、つまりこの両歌は、男が若い娘と別れる同じ場面で「久しき時ゆ(ずっと前から、私は貴方が好きだった)」と情緒を盛り上げているのだから、「袖振る」は正にく手を振る>であり、だからこそ「ふる」の言葉遊びに興じる華やぎで石上神社の瑞垣が洒落になるのであって、歌意としては<巫女舞い>を示していない。ただ、詠み手に<巫女舞い>を多くの人が連想するであろうと言う意図はあったかもしれない。いや、つまり私が言いたいのは、「をとめごがそでふる」を<舞姫が踊る>という意味で明示したのは、この作者の本歌取りの手法かもしれない、という事だ。

とのたまふぞ(と若君が仰るのは)、うちつけなりける(唐突でした)。

若うをかしき声なれど(若くて美しい声だが)、誰ともえ思ひたどられず(舞姫には誰とも分かりようも無く)、なまむつかしきに(気味悪く思っていたところに)、化粧じ添ふとて(化粧を直すために)、騒ぎつる後見ども(慌ただしく係りの女房たちが)、近う寄りて人騒がしうなれば(近付いて来て騒がしくなったので)、いと口惜しうて(若君はとても残念がって)、立ち去りたまひぬ(その場を立ち去りなさいました)。

[第三段 宮中における五節の儀]

*浅葱の心やましければ(下級役人を示す制服の水色の上着を引け目に思って)、内裏へ参ることもせず(若君は御所へ参内する事も無く)、もの憂がりたまふを(物憂げになさっていたが)、五節にことつけて(この日は五節の祝だからと)、直衣など(私服などの)、さま変はれる色(いつもと違った色の服の)聴かれて(ゆるされて、宮中着用を許されて)参りたまふ(参内なさいます)。
*「あさぎ」は大辞林に<「葱(き)」はネギの古名。薄い葱の葉の色の意。>と説明があり、小学館百科には<平安時代から用いられた色名で、服制上では六位以下の袍(ほう)の色であるところから、六位の袍または六位の官人を浅葱といったこともある。>とある。「浅緑」のことであり、色見本で見れば「水色」だ。

*きびはにきよらなるものから(小柄で可愛らしい姿ながら)、まだきにおよすけて(年に似ず大人びていて)、されありきたまふ(宮中を気取って歩きなさいます)。帝よりはじめてたてまつりて(帝を初めに申し上げ、以下のお歴々も)、思したるさまなべてならず(若君に感心なさる事ただならず)、世にめづらしき御おぼえなり(宮中切つての御評判でした)。 *少々込み入った長い文でも、現代語に近い言い回しの場合もあったかと思うが、この文のように短く、込み入った内容でも無さそうなものが、まるで呪文のように現代語に遠い場合がある。「きびは」は<子供>だから「きびはに」は<子供らしく>か<幼くて><くらいか>と思うが、元服した12歳の上流子弟を描写している此処の言い換えには、「わらは」ではないが<ちょこまかしている>印象なのだろうと考えて<小柄>を支持したい。「きよら」は<美麗>とあり、端然とした顔かたちを言っているように思うが、現代語では、もしかすると現代語の方に問題があるのかもしれないが、そのへんのこととは何でも<可愛い>と言う。「まだき」は<まだその時にならないうちに、早くも。>とあるが、無理に<背伸びしている>のではなく<年に似ずしっかりしている>、という褒め言葉のようだ。「およすく」は<成長する、大人びる、老ける>とあり<長じる>に近い意味のようで、この物語では良く使われている語だが、どうも現代語につながる語感が掴めず、どう言い換えても収まりが悪い。それでも、此処の意味はやはり<大人びる>だ。「さる」は「戯る」で<ふざける、はしゃぐ>の他に<世慣れる、しゃれる、風流がる>とある。文意からして、此処の「されありく」は<澄まし顔で歩く>くらいか。このように語意を整えた言い換え文を読み返してみると、やはり然程は特別な内容でもないのに、原文は外国語のように、本当に韓国語やその地方語かも知れないし、それは日本に於いての地

方言や部族語を意味していたのかも知れないが、馴染みの無い言い回しだ、と改めて感じる。なので、方言によってはそれほど遠くない語感に思う人も居るのかもしれないが、私にはこの物語に於ける原文と現代語との違いの変遷に、考察に値する社会構造の変化を読む事が出来そうに思えるほどだ。まあ、考察自体は遠慮するが。

五節の参る儀式は(五節が宮中で舞う儀式では)、いづれともなく(いづれ劣らず)、心々に二なくしたまへるを(各々が出来る限りの盛装をなさっていたが)、「舞姫の容貌、大殿と大納言とはすぐれたり(舞姫の容姿は大殿のものと大納言のものとが優れている)」とめでののしる(と参列者たちが口々に褒めます)。げに、いとをかしげなれど(確かにこの二人の舞姫は大変に美しかったが)、*ここしうつくしげなることは(無邪気で可愛らしい事に於いては)、なほ大殿のには、え及ぶまじかりけり(大納言の方はやはり大殿の方には及ばないようです)。*「子こし」は<子供らしい、あどけない>。「うつくし」は<可愛らしい>。舞姫の評価基準にこうした価値観があるのは、五節が<巫女舞い>故に処女性が求められたのだろう。童女が付いて回るのも妖精を思わせる演出で、舞姫を天女化する。

ものきよげに今めきて(清純で妙齡の)、*そのものとも見ゆまじう仕立てたる様体などの(その娘の地が分からない程に飾り立てた衣装や小道具の)、ありがたうをかしげなるを(滅多に無い美しさを)、かう誉めらるるなめり(こう褒められているようでした)。例の舞姫どもよりは(例年の舞姫たちよりは)、皆すこしおとなびつつ(引き続いての宮仕えに備えてか、皆少し大人びていて)、*げに心ことなる年なり(確かに格別に催されたこの年の五節でした)。*「そのもの」は<それ自体→娘自身>と読む。厚化粧で本人が分からないのは良く有る事で、それでも例えばお稚児さんなどは子供ならではの可愛さが有る。一応、そういうことを類推して言い換えたが、化粧心が分からない私には神懸りの表現として理解する事にする。*注に<『完訳』は「「げに」は、帝の仰せ言(「宮仕へすべく仰せ言ことなる年なれば」)をさす」と注す。>とある。なので、「少し大人び」の言い換えに<宮仕え>を補語した。が、だとすると例年の舞姫はやはり祀り事の時だけの添え物ないし飾り物としての記念に過ぎなかった、とはいえそれ自体で有意義かとは思いますが重負担だったか、のかと思ひ遣られる。が、だとすると「心殊なる」の企画意図は何なのだろう。一つには権勢誇示を意図した特に盛大な催事ではあろうかと思うが、舞姫がそのまま宮仕えに入る事の意味は、その催事成功の<記念>を長く明示するための写真の無い時代の一方策だったのかもしれない。

殿参りたまひて御覧ずるに(源氏大臣も参内なさってこの五節舞いをご覧になると)、昔御目とまりたまひし*少女の姿思し出づ(昔お目を留めなされた筑紫五節の姿を思い出さいます)。*「をとめ」は注に<筑紫五節(「花散里」巻初出)をさす。>とある。「花散里」巻では、25歳の光君が義母の妹である「花散里」を訪ねる際に、寄り道しようとして断られた「中川の女」の行で、思い出した女として「筑紫五節」の名前だけが出てきた。ただ、その忍び歩きの際の従者も惟光だった、という関連は有る。が、人物像として「筑紫五節」が描かれたのは、「須磨」巻に於いて26歳の光君が須磨への退去を余儀なくされた春の三月二十日過ぎから半年後の秋九月頃に、筑紫五節が父君の大宰府大式の上京に伴って須磨を通る際に、失意の光君を歌を便りにして慰めた行だった。尤も、然程には詳しい描写でもなかったが。

*辰の日の暮つ方つかはず(そして五節舞いの最終日である辰の日の日暮れ時に筑紫五節に手紙をお送りになります)。御文のうち思ひやるべし(その御文面はご想像いただくとして、このように贈歌なさいました)。*注に<五節舞の最終日。筑紫五節に歌を贈った。>とある。辰の日は「豊明節会」という晩餐会が行われる、最終日にして衆人に対しては本番の五節舞披露宴だったらしい。

「乙女子も 神さびぬらし 天つ袖 古き世の友 齡経ぬれば」(和歌 21-08)

「貴方にとっては昔でも、こちらは変わらぬ宮仕え」(意識 21-08)

*「をとめごも(舞姫だった貴方も)かんさびむらし(年をとった事でしょう)あまつそで(袖を振って巫女舞いをした)ふるきよのとも(懐かしい団欒の日から)よはひへぬれば(ずいぶん経ったので)」とは何とも率直なご挨拶だが、五節の巫女舞いを神事に掛けた言い回しの妙と昔の雅を共有した懐かしさを滲ませる親近感が、この歌の味わいなのだろうか。まあ、太政大臣から親しみのこもった手紙をもらえば、荣誉に思っって不思議は無い。

*年月の積もりを数へて(長年の月日を思っって)、うち思しけるままのあはれを(自然にお感じになった感慨を)、え忍びたまはぬばかりの(そのままお書きになっただけのお手紙に)、をかしうおぼゆるも(筑紫五節が懐かしくお思いになっっても)、はかなしや(帰らぬ日々です)。 *光君が筑紫五節を見初めたのが何時なのかは明示されていない。が、光君は「花散里」巻が 25 歳で今が 33 歳だから、少なくとも 8 年前であり、10 代の頃なら 15 年くらいは前になる。

「かけて言へば今日のこととぞ思ほゆる、日蔭の霜の袖にとけしも」(和歌 21-09)

「思えば昨日の事のように、貴方が帯を解いたのは」(意識 21-09)

*歌は元々言い回しの妙だから、言い換えは成立しない。そこで自分なりに味わった心算で、意味の似通った現代語の別の歌みたいなものをあしらっては「意識」と称して遊んでいるわけだが、光君の贈歌と同じにこの返歌も五節舞いの縁語で言い返す事自体が主たる意味らしいので、いっそう脱力感を覚えて「意識」した。が、その脱力感がこの歌には合っている様に我ながら納得する。ともあれ、以下の参照ノートこそがこの歌の味わいとは言えそうだ。「掛けて言へば」で<そう言えば>をわざわざ 6 文字にしたのは、「日陰」に掛けているからだ。「ひかげ」は「日陰のしも(忍んで)」では正に<日の当たらない所>の意味になるが、「掛けて言へば」を受けると<ひかげのかづら>の意味になる、ようだ。「ひかげのかづら」自体は植物名で<シダの一種>とのこと。が、「古事記」に<天照大神が天岩屋戸に隠れた時に、アメノウズメノミコトがヒカゲノカヅラを冠にして踊り誘い出した>という有名な神話があり、何と<五節の舞姫もこれを髪飾りとする>と辞書にあることで、俄然と関連付く。そして何と、奈良の率川神社(いさがわじんじゃ)で 6 月 17 日の「ゆりまつり」で四人の巫女がユリを手にヒカゲノカヅラを髪飾りにして舞う、という催事が今も行われているとのこと。有難い事に、「率川神社 ゆり祭り」で Web 検索するとその模様が多くの写真で紹介されていて、御所の五節の一端が偲ばれる。詰まり「掛けて言へば」は<ヒカゲノカヅラを付けて五節を舞った日を思い出せば>を複意する。「霜」は<白髪をたとえて言う語>とあり<昔を偲ぶ>枕になりそうで、「袖」は<舞い>を意味するから、「霜の袖に」で<舞姫になったのは遠い昔の事ですが>を言い表せる。と同時に、これは「日陰の下に(こっそり肌を合わせて)」であり、「霜の袖に解く」は<頑なな心を絆して熱い情を交わす>である。「霜の解く(霜が溶ける)」自体は情景と言うよりはただの語呂だが、11 月の季節柄としては上手い言い回し。通せば<言われてみればヒカゲノカヅラを付けて五節を舞った日が、この手紙を貰った今日の事のように思えます、昔の事ですが貴方はそんな私を忍んで訪ねて来て、処女の固い気持ちと蕾みを溶かしたのですものね>と、この詠み手と読み手の生活感にしてみればちょっと気を利かせたくらいの言い回し、という作者の意図なのだろうが、現代語で意味を整理すれば是だけの事を五節は三十一、いや三十二文字で言い返して来たのである。

*青摺りの紙よくとりあへて(舞姫が着る小忌衣と同じ青摺り模様の紙を折良くも取り揃えて)、紛らはし書いたる(奥ゆかしく絵柄に紛らわせて書いてある、その)、濃墨(こずみ)、薄墨(うす

ずみ)、草がちに(さうがち、崩し字気味に)うち交ぜ乱れたるも(ない交ぜになって親しげなもの)、人のほどにつけてはをかしと御覧ず(几帳面な五節にしては気が利いていると源氏大臣は御覧なさいます)。*「あをずり」に注釈は無いが、与謝野訳文に「新嘗祭の小忌の青摺り」とあるので「小忌(おみ)」を調べると、Yahoo!百科に「小忌衣(おみごろも)」がく日本古代以来の祭服の一種。小忌とは不浄を忌み嫌う、すなわち清浄という意味で、大嘗会(だいじょうえ)や新嘗祭(にいなめさい)などの宮中の神事に、小忌人(おみびと)とよばれる祭官や、舞姫が着用する上着。>と説明されている。絵はないかとWeb検索すると「源氏物語に見る平安時代の生活」サイトの「五節の舞姫の装束」ページに風俗博物館展示品の写真が掲載されていて、舞姫が青摺りの衣を上掛けして青摺りの扇を手に舞う姿を見る事が出来た。その青摺りの紙を用意した五節の折良さは必脚もの、ではないかと思うが。また同ページには、様式化した組み紐の「日蔭鬘」も説明されていて非常に参考になる。

冠者の君も(無官の若君も)、人の目とまるにつけても(舞姫が目に入る度に)、人知れず思ひありきたまへど(少しでも近付こうと其れと無い素振りて歩き回りなざるが)、あたり近くだに寄せず(控え室近くには手伝いの女房たちが人を寄せ付けないように)、いと*けけしうもてなしたれば(陰しい顔つきで取り巻いていたので)、ものつつましきほどの心には(物怖じする年頃の若君は)、嘆かしうてやみぬ(嘆いて諦めました)。*「けけし」はくそっけない、よそよそしい>。

容貌はしも(それでも舞姫の面影は)、いと心につきて(強く若君の心に残って)、つらき人の慰めにも(逢えない藤原の姫君への思いを静める為にも)、*見るわざしてむやと思ふ(可愛がってやりたいものと思ひます)。*「見る」はく会う、世話する、試す、理解する>そしてく情交する>と含みの有る語だが、この場合はく情交する>以外は消去されるだろう。ただ、「わざ」はく行動、仕事、技能>であり、此处ではく事の次第>でありく実際にそうなること>だろうから、ヤルことはヤルわけだが、「ものつつましきほどの心」には「見るわざ」はくものにする(征服欲)>よりはく可愛がる事(親近感)>の方が馴染む気がする。

[第四段 夕霧、舞姫の弟に恋文を託す]

やがて皆とめさせたまひて(帝は四人の舞姫を皆居残らせなさって)、宮仕へすべき御けしきありけれど(そのまま宮中で女官暮らしをするようにとのご意向であったが)、このたびはまかでさせて(一度は引き下がらせて)、*近江のは辛崎の祓へ(近江守の娘は大津唐崎神社で神懸りを解く御祓いを受けさせて来ることとし)、津の守は難波と(摂津守の娘は浪速難波神社でと)、挑みてまかでぬ(先を競って退出しました)。*注にく良清の娘は近江国の辛崎で、惟光の娘は津国の難波で、それぞれ父親の任国で神事を解くための祓いをする。>とある。そういう習わしだったのだろうと思う他は無い。おそらく、その祓えも一寸した祭事として政権の権威付けとか、地域勢力の団結を確認する場という位置付けではあったのだろう。だから、それなりの物入りだったかも知れない。

大納言もことさらに参らすべきよし奏せさせたまふ(大納言も祓えを済ませてから改めて出仕させるべき旨を帝に申し上げなさいます)。左衛門督、*その人ならぬをたてまつりて(当日になって代理を仕立て上げなされたので)、咎めありけれど(問題となったが)、それもとどめさせたまふ(その娘も帝は女官に採用なさいます)。*注にく『集成』は「実子でない娘を差し出したのだろう。『完訳』は「資格のない人を。詳細は不明」と注す。>とある。が、「実子でない娘」なら大殿もそうであり、「資格のない人」も藤原家の縁者で身分上の人材不足は有り得ない。「詳細は不明」なのだから私が何かを知る由は無いが、予定されていた「その人」に何らかの事情で急に不都合が生じて代役が立てられた、というのが有り得そうな話かと

思う。だから帝はその事情を理解されてお許しになった、と考える他は無い。その事情とは例えば、穏当に考えれば身内に不幸でもあったのだろうし、波乱であれば密通が露見したとかかもしれないが、左衛門督自身についての説明も含めて、作者のこの辺の不親切には閉口する。

津の守は、「典侍あきたるに(ないしのすけの席が空いているので、娘をぜひその職分にお就け下さい)」と申させたれば(と使者に申させてきたので)、「さもや勞らまし(そのように報いてやろう)」と大殿も思いたるを(と大殿もお思いのようだと)、かの人は聞きたまひて(若君は聞き付けなさって)、いと口惜しと思ふ(帝の女房では手が届かないと残念に思います)。

「わが年のほど、位など、かくものげなからずは(このように物の数に入らない立場でなければ)、乞ひ見てましものを(五節の娘に打ち明けてみたいものを)。思ふ心ありとだに知られでやみなむこと(恋心があることさえ知られずに終わってしまうとは、情けない)」

と、*わざとのことにはあらねど(思いがけない出会いだっただが)、うち添へて(幼馴染みの姫君の事に加えて)涙ぐまるる折々あり(五節を思い出しては感情が揺れ動く事がありました)。 * 「わざと」には<殊更に、格別に>または<業務として、正式に>という意味があるようだが、現代語では<本気ではなく冗談として>または<別の事を引き出すために鎌を仕掛ける>という意味で使う語で、当時でも<形ばかりに>という使い方はあったようだ。先ず、「業務」は概念が違う話なので除外する。次に、「あらねど」と打消しが確定条件となる逆接構文で、現に<若君は五節を格別に思っている>のだから「格別に」を否定しては条件項目自体が矛盾するので、これも除外する。とすると、やはり「わざと」は<愛想だけの>くらいの意味に見える。が、そうすると「あらねど(～なかったが)」の「あらね(なかった)」という打消しは条件としては成立するが、「ど(けれども)」という逆接ではなく「で(ので)」という順接でないと以下に繋がらない。そこで注目されるのが「わざとのこと」の「こと」の意味だ。「こと」は<事柄>や<事の次第>だから、「わざとのこと」を<形ばかりの事柄>というよりは<特別な事柄>と言い換えた方が収まりが良い。だが、やはり若君には五節は<特別な事柄>なのである。いや、<特別>なのは<思い>ではなく<事柄>だとすると、「わざと」は<わざとらしい→いかにもそれらしい→予測のつきやすい→ありきたりの>の短形だと思いつく。つまり、「わざとのことにはあらねど」はほぼ成句で<在り来たりの事ではなかったが→思い掛けない事だったが>である、多分。

兄弟の(せうとの、五節の弟で)童殿上する(見習いの御所勤めをする少年で)、常にこの君に参り仕うまつるを(いつも若君に慣れ親しんで仕え申す者を)、例よりもなつかしう語らひたまひて(若君は普段以上に親しげに話し掛けなさって)、

「五節はいつか内裏へ参る(五節の参内は何時になるのかな)」と問ひたまふ(とお尋ねになります。すると乙人は、)。

「今年とこそは聞きはべれ(今年の内だとは聞いております)」と聞こゆ(と答えます)。

「顔のいとよかりしかば(顔立ちがとても良かったので)、すずろにこそ恋しけれ(そわそわと心惹かれるんだ)。ましが常に見るらむも羨ましきを(おまえならいつでも会えるだろうから羨ましいので)、また見せてむや(私にもまた会わせてほしいな)」

とのたまへば(と若君が仰ると)、

「いかでかさははべらむ(とてもそれは出来ません)。心にまかせてもえ見はべらず(私も思うようには会えないのです)。男兄弟とて(をのこはらから、男の兄弟ということで)、近くも寄せはべらねば(近付けもしませんので)、まして(ましてや)、いかでか君達には御覽ぜさせむ(どうして貴方様にお会わせ申せましょう)」

と聞こゆ(と答えます)。

「さらば、文をだに(では手紙だけでも、届けてくれ)」とて賜へり(と若君は乙人にお渡しなさいました)。

「*先々かやうのことは言ふものを(以前にこうしたことはせぬようにと言っただろうに)」と苦しけれど(と父親から姉妹への文使いを禁止されていたので弟は困ったが)、せめて賜へば(強く若君が遣いを仰せになるので)、*いとほしうて持て往ぬ(何とか役に立ちたいと持ち帰りました)。*「さきざき」は<以前、過去>。注には<父親から姉妹への文使いを禁止されていたことをいう。>とある。*「いとほし」は多様な語で、この物語でも頻繁に使われているが、その原義は「厭ふ+らし」の<厭なことになりそう>だと以前もノートした。で、その悪い予測から<懸念する、不安に思う>とも言えるし、大事な人を気遣えば<可哀相、気の毒>、さらに庇いたい気持ちがあれば<愛しい、いじらしい>などとも言い表せる語というわけだ。此处では、弟と若君の立場を考えて<助力したい、役立ちたい>くらいだろう。

年のほどよりは(五節は年の割には)、されてやありけむ(ませていたのか)、をかしと見けり(若君の手紙を喜んで見ました)。緑の*薄様の(緑色の薄い紙で)、好ましき重ねなるに(きれいに包装した文で)、手はまだいと若けれど(筆跡はまだとても子供っぽい)、生ひ先見えて(学識の高そうな立派な字で)、いとをかしげに(風情豊かに)、*「うすやう」は<薄手の鳥の子紙・雁皮紙(がんび)し>。また、一般に薄手の和紙。>とあり、また<襲(かさね)の色目の名。衣を何枚か重ねて着るとき、同色のものを外側から内側へしだいに色を薄くして、下の2枚を白にする重ね方。>とも大辞泉にある。「とりのこがみ」は<雁皮(がんび)を主原料とした上質の和紙。鶏卵の色に似た淡黄色で、強く耐久性があり、墨の映りもよい。福井県・兵庫県産のものが有名で、越前鳥の子・播磨紙(はりまがみ)ともいわれる。>とある。「雁皮」は<ジンチョウゲ科の落葉低木。暖地に多い。高さ約1.5メートル。葉は卵形。夏、筒形の薄黄色の小花が集まって咲く。樹皮の繊維は紙の原料となる。《季 花=夏》>とある。但し、この場面の季節は11月末以降の冬である。

「日影にも しるかりけめや 少女子が 天の羽袖に かけし心は」(和歌 21-10)

「隠しもしないこの気持ち、貴方の舞は素晴らしい」(意識 21-10)

*「日影」は<日の光、日差し>。だが、「ひかげ」は「日陰」であり「ヒカゲノカヅラ」であり、それを付けて踊った五節の舞姫でもある。「しるかりけめ」は「著し(歴然と)」「あり(している)」「けむ(であろう)」という漢文調のようで、若君の学生らしい青臭さや堅苦しさを表現しているのだろうか。「をとめご」「あまのはそで」は五節の縁語、というかそのままだが、それくらい率直な言い回しの歌、なのだろう。「日の下に紛れないように貴方ははっきりと分かっているでしょう五節の貴方の舞い姿に懸想した私の心を」の他に読み様も無い天晴れな楽しい気分。

二人見るほどに(姉弟でこの手紙を見ていると)、父主(ちちぬし、父親が)ふと寄り来たり(ふと立ち寄りました)。恐ろしくあきれて(二人は恐れ驚いて)、え引き隠さず(手紙を引き隠しも出来ません)。

「なぞの文ぞ(何の手紙だ、それは)」

とて取るに(と言って父の惟光が手紙を取って見ると)、面赤みてゐたり(五節は顔を赤らめていました)。

「よからぬわざしけり(けしからぬ仕業だな)」

と憎めば(と父が叱るので)、せうと逃げて行くを(弟が逃げて行くのを)、呼び寄せて、

「誰がぞ(誰からのものだ)」

と問へば(と父が問うと)、

「殿の冠者の君の(殿の若君が)、しかしかのたまうて賜へる(これこれと仰ってお渡しになりました)」

と言へば(と弟が言えば)、名残なくうち笑みて(父は屈託無く笑って)、

「いかにうつくしき君の御され心なり(なんとも可愛らしい若君のお戯れだ)。*きむぢらは(おまえは)、同じ年なれど(若君と同じ年だが)、いふかひなくはかなかめりかし(しっかりお相手が勤まりそうも無いな)」 *「きんぢ」は<おまえ、きみ、なんじ>。注には<「きむぢ」は、二人称。「まし」よりやや敬意がある。「ら」は複数を表す接尾語。>とある。が、「ら」は複数とは思えない。弟は「同じ年」が仮に近似の同類と言う意味だとしても、「はかなし(相手を果たせない)」を既定する対象になりえない。

など誉めて(などと若君を褒めて)、母君にも見す(母君にもお手紙を見せます)。

「この君達の(この若君が)、すこし人数に思しぬべからましかば(娘を少しは一人前にお考えになって下さるなら)、宮仕へよりは(御所へ女官勤めに出すよりは)、たてまつりてまし(若君に差し上げたいものだ)。殿の御心おきて見るに(若君の父上である殿のご性格を考えると)、見そめたまひてむ人を(一度お見初めなされた女を)、御心とは忘れたまふまじきとこそ(御自分の方からはお見捨てにならない所こそ)、いと頼もしけれ(とても頼もしい事だ)。明石の入道の例にやならまし(私も第二の明石入道にでもなろうか)」

など言へど(などと惟光は言っていたが)、*皆急ぎ立ちにたり(母も娘も一時の他愛無い話と家事に戻っていました)。 *この惟光の夢想到に家族が取り合わないような描写は、一見今のホーム・コメディを思わせるような軽妙さだが、とんでもない事で、この家は摂津守であり、蔵人の名家であり、今をときめく源氏大臣の腹心の家格なのである。つくづく雲上人の茶飲み話だが、それが今に伝わり、私のような者が読んでいる事の方が意外だろうか。

[第五段 花散里、夕霧の母代となる]

かの人(その若君は)、文をだにえやりたまはず(藤原の姫君に手紙さえ出す事がお出来にならず)、立ちまさる方のことし心にかかりて(人柄をよく知っているだけに心に深く浮かんで)、ほど経るままに(時が経つほど)、わりなく恋しき面影に(無性に恋しい面影に)またあひ見でやと思ふよりほかのことなし(もう会えないのではないかと思うと胸が一杯でした)。

宮の御もとへ(大宮邸にも)、あいなく心憂くて参りたまはず(どうにも気乗りせずにお出掛けなさいません)。おはせしかた(姫がいらした時の様子や)、年ごろ遊び馴れし所のみ(長年一緒に遊び慣れた場所ばかりが)、思ひ出でらるることまされば(思い出される一方なので)、里さへ憂くおぼえたまひつつ(育った家まで辛く思いなさって)、また籠もりゐたまへり(結局東院の勉強部屋に閉じこもっていらっしやいました)。

殿は(源氏大臣は)、この西の対にぞ(その東院の西の対に住まう花散里に)、聞こえ預けたてまつりたまひける(頼み申して若君の世話をお任せなさっていらっしやいました)。

「大宮の御世の残り少なげなるを(大宮の御寿命も残り少ないだろうから)、おはせずなりなむのちも(亡くなった後に備えて)、かく幼きほどより見ならして(幼い今の内から慣れ親しんで)、後見おぼせ(お世話して下さい)」

と聞こえたまへば(と殿が申しなさると)、ただのたまふままの御心にて(花散里はただ言い付けに従うご性格なので)、なつかしうあはれに思ひ扱ひたてまつりたまふ(若君を親しみを持って身内としてお世話申しなさいます)。

*ほのかになど見たてまつるにも(若君はその西の対の御方を何かの折にちらりとなど拝見申し上げるにも)、 *注に<夕霧が花散里を。>とある。確かに、分かりにくい主語省略分だ。

「容貌の*まほならずもおはしけるかな(顔立ちは必ずしも美人ではいらっしやらないのだな)。かかる人をも(こうした人でも)、人は思ひ捨てたまはざりけり(父上はお見捨てなさらなかったわけだ)」など、 *「まほ」はくよく整っているさま、完全なさま>と古語辞典にある。もう共寝をする間柄ではないと説明されていた花散里だが、光君は王家の仕来たりと心構えに長じたこの女を重用する。まあ、何ほどかの実話に基づく構成と言ってしまうえば実も蓋も無いが、こういう人物を丁寧に描く作者の着眼点は、人が生きる意味を深く感じさせて、この物語に厚みを加えている、とは思う。

「わが(私が)、あながちに(無闇に)、つらき人の御容貌を心にかけて恋しと思ふも*あぢきなしや(会えない人の顔かたちを思い描いて恋しがるのも良くないな)。心ばへのかうやうにやはらかならむ人をこそあひ思はめ(気立てがこのように穏やかな人とこそ思い合うべきなんだ)」と思ふ。また、 *「あぢきなし」は<不当だ、価値が無い、不都合だ>と古語辞典にある。

「向ひて見るかひなからむもいとほしげなり(向かい合って見る甲斐の無いほど器量の悪い妻と言うのも具合が悪そうだ)。かくて年経たまひにけれど(こうして長年連れ添っていらして)、殿の(父上が)、さやうなる御容貌(対の御方のあのような御顔立ちと)、御心と見たまうて(御心

根を御覧になって)、*浜木綿ばかりの隔てさし隠しつつ(浜木綿の幾重もの葉のように情熱は奥に秘めて表立っては示し合う事も無く)、何くれともてなし*紛らはしたまふめるも(細々と面倒を見る事で夫婦仲を取り繕っていらっしゃるのも)、むべなりけり(お互いが向かい合わずに穏やかに暮らすには、理に適った為さりようだ)」 *「浜木綿(はまゆふ)」はくヒガンバナ科の常緑多年草。暖地の海岸に自生し、高さ約 50 センチ。葉は長く幅広で、質は厚い。夏、葉の間から花茎を伸ばし、十数個の香りのある白い花を傘状につける。花びらは細長く、反り返る。はまおもと。《季 花=夏 実=秋》>と大辞泉にある。花びらが「木綿(ゆふ)」に似ている事からの名称、とのこと。「ゆふ」はくコウゾの皮の繊維を蒸して水にさらし、細かく裂いて糸としたもの。主に幣(ぬさ)として神事の際にサカキの枝にかける。>。今は白い紙の神事の御標が昔はコウゾの皮だったらしい。ところで注にはく「み熊野の浦の浜木綿百重なる心は思へどただにあはぬかも」(拾遺集恋一、六六八、柿本人麿)を引く。>とあり、古語辞典にも「浜木綿」はく葉が幾重にも重なっている事から「百重(ももえ)」「幾重」「重ね」に掛かる序詞>とある。引歌は背景が分からないので言葉面だけ拾えば、「願掛け修行で熊野詣に来たので海岸に咲く浜木綿の葉のように何度も貴方を思い出すが今は会えない」という風景と情感の味わい、だろうか。延いては「浜木綿ばかりの隔て」がく信頼しているが睦まない事情>を意味するのか、良く分からない。ただ、「さしかくす」はくかざして隠す>とあるので、「隔て」は形態形容としてはく重なった葉>と見る他は無く、その「隔て」の意味はやはりくよそよそしさ>だろう。すると「浜木綿ばかりの」はく浜木綿の葉のように重ねた思いの分だけ奥に仕舞い込んだ>という意味になって、何とも意味深な機微に触れる文に見えるが、だとすると是が 12 歳の若君の思いとは到底納得できない。実に難文だ。 *「紛らはす」はく隠す、ごまかす、紛らす>と古語辞典にある。何をごまかすのか。此处で想定されている事象は、夫婦なのに共寝をしない、のに夫婦の形態を維持する、事だとしたら、「紛らはす」はく夫婦の体裁を取り繕う>みたいなことだろうか。ということは若君は、性愛の無い夫婦は本来の姿ではない、という認識に立っていることになる。そして、この二人の関係を見て、しかしそれも「むべなりけり」と理解した、という文のようだ。若君のこの認識は、しかし「浜木綿」を持ち出したにしては幼稚すぎないか。思うに、「夫婦」はく子育ての為に男女が協力する生活形態>で、性愛や情愛は重要ではあるがその構成要素の一つに過ぎない。「子育て」こそが社会にとっても、個人にとっても、人間が生きる意味の主軸だ。少なくとも、そうあるべきだろう。いやしかし、人間は意味の前に生きてはいる。言はば、それが世の中だ。勿論、是は私の私見で、是が 12 歳の人物の認識に相応しいとは思わないが、権力の中枢にいる貴族の家に育って、王家の滴はともかく、性愛至上主義みたいな言い方は少女趣味に過ぎる。かと思えば、何と是が「少女」巻と来た。

と思ふ心のうちぞ(と考える若君の深慮は)、*恥づかしかりける(大した物でした)。 *「はづかし」はく相手の優れている事を褒めるのに用いる語>でもあって、此处でも語り手による若君の評。注にはく『集成』は「大人も顔負けの観察ぶりなのだった。草子地」。『完訳』は「語り手の夕霧評。彼の目と心が源氏の本性を捉え、その存在を相対化」と注す。>とある。『完訳』の言う「源氏の本性」とは、当段の文面から窺えば光君のく屈折した冒険者にしてご都合主義者にして王朝文化の理解者>たる事あたりだろうか。いずれにしても、「本性」とはちょっと乱暴な言い方だ。

大宮の容貌*ことにおはしませど(大宮は出家姿でいらしたが)、まだいときよらにおはし(まだとてもお美しく)、ここにもかしこにも(二条院でも大宮邸でも)、人は容貌よきものとのみ目馴れたまへるを(女は顔立ちが良い人ばかりを見慣れて御出でだったのが)、もとよりすぐれざりける御容貌の(もともと優れていなかった花散里の顔立ちが)、やや*さだ過ぎたる心地して(やや盛りを過ぎた感じで)、痩せ痩せに御髪少ななるなどが(痩せて髪も少なくなったりして)、かく*そしらはしきなりけり(若君はこのように難を付けたくなるのでした)。 *「こと」は「異」でく普通と

違っている。注に「出家した尼姿である。」とある。*「さだすぐ」は「時機を逸する、盛りを過ぎる」。*「そしらはし」は「そしりたい、非難したい」。ただし不安になるのは、花散里でこれほどの難くせなら末摘花はどうなるのかだが、まあどうでもいい。この段の論評は面白いが、美女に囲まれて下へも置かず育てられたのは光君も同じだろうに、若君の冒険心の無さは気弱な点では何となく共感できるものの、さすがにそうした人物像では濃い物語には成りそうもないと気付かされるし、藤氏大臣の真つ向勝負の冒険心では女語りに耐える湿気が足りない。改めて光君を主人公に据えた意味を、作者自身が再確認しているかのような印象を受ける。というか、そう受け止めざるを得ないほど含みの多い難解な筆致だ。

[第六段 歳末、夕霧の衣装を準備]

年の暮には、睦月の(むつきの、正月の)御装束など(挨拶回りの衣装などを)、宮はただ、この君一所の御ことを、*まじることなういそぎたまふ(他事はさておき用意なさいます)。*「まじる」は「社交する→公務を勤める」の語感だから、「まじることなう」は「来客を迎えず→諸事にとらわれず」ぐらいかと思うが、訳文の「余念無く」も成句としては妥当かもしれない。

あまた(何枚もの)*領(くんだり、一揃えを)、いときよらに仕立てたまへるを見るも(宮が仕立てなされたのを見るのも)、もの憂くのみおぼゆれば(若君はうっとうしいばかりにお思いになって)、*「くんだり」は「装束などの揃っているものを数える語」とある。富家であれば、その「一揃え」が何組も在ったのかも知れないが、正装の装束は「一揃え」でも何枚もの着物になるだろうから、私は「一揃え」が用意されていたと読んで置く。何だか、その方が手作り感があって有難みが強い。

「朔日(ついたち、元旦)などには、かならずしも内裏へ参るまじう思ひたまふるに(必ずしも御所へ年賀に参内いたさぬと存じておりますのに)、何にかくいそがせたまふらむ(どうしてこのように晴れ着を用意なさるのですか)」

と聞こえたまへば(と申しなさると、宮は)、

「などてか(決して)、さもあらむ(それではいけません)。老いくづほれたらむ人のやうにものたまふかな(老いて弱り切った人のようなことをおっしゃいますな)」

とのたまへば(と仰るので、若君は)、

「老いねど(老いてはいないが)、くづほれたる心地ぞするや(弱り切った気分はするな)」

と独りごちて(と口ごもって)、うち涙ぐみてあたまへり(涙ぐんでいらっしやいました)。

「かのことを思ふならむ(姫と引き離された事を気に病んでいるのだろう)」と、いと心苦しうて(ひどく同情して)、宮もうちひそみたまひぬ(宮も眉をひそめて困惑なさいました)。

「男は(男と言うものは)、口惜しき際の人だに(低い身分であっても)、心を高うこそつかふなれ(気位を高く持ってお上にお仕えするものです)。あまりしめやかに(いつまでもめそめそと)、かくなものしたまひそ(そのようにしなさいますな)。何とか(何だって)、かう眺めがちに思ひ入

れたまふべき(そうくよくよと考え込む事がありましようか)。*ゆゆしう(度が過ぎます)」 *「ゆゆし」は<神聖で恐れ多い>また逆に<不吉で忌まわしい>という人智の及ばない力に謹んで対する気持ちを表す語で、その転意に<程度が甚だしい>がある、とのこと。大宮は娘を早くに亡くし、兄帝を亡くし、夫も亡くしたので、喪失感は深いだろうが、社会的な挫折には遭っていない。生来の高位のエネルギーを保持し、言わばオーラのある、好き嫌いは別に<強い>人なのであり、此処の語調はその人柄が表れた言動に思える。

とのたまふも(と宮が仰ると、若君は)、

「何かは(いえ、何もそんな)。六位など人のあなづりはべるめれば(六位などと人が私の低い身分を侮るようなので)、しばしのこととは思いたまふれど(此処しばらくの事とは存じますが)、内裏へ参るものの憂くてなむ(参内するのも気が重いのです)。

故大臣おはしまさましかば(御祖父様が生きていらしたら)、戯れにても(冗談にも)、人にはあなづられはべらざらまし(人に見くびられはしないでしょう)。もの隔てぬ親におはすれど(源氏大臣は実の父上でいらっしゃいますが)、いと*けけしうさし放ちて思いたれば(私をひどくよそよそしく遠ざけなさるので)、おはしますあたりに(お側近くには)、たやすくも参り馴れはべらず(気安く参って親しくする事が出来ません)。東の院にてのみなむ(父上が東の院に御出での時だけ)、御前近くはべる(私はお側近くに参ります)。 *「けけし」は<よそよそしい>。「さしはなつ」は<遠ざける>。

対の御方こそ(その東の院の対の御方だけは)、あはれにものしたまへ(やさしくしてくださいますが)、*親今一所おはしまさましかば(母上が生きていらしたなら)、何ごとを思ひはべらまし(何も思い悩む事も無いでしょう)」 *注に<実の親葵の上をさす。「ましか」反実仮想の助動詞。>とある。しかし、是は大宮に対しては禁じ手、禁句だろうに。若君の寂しさに嘘は無いのかもしれないが、甘え処の急所を押さえた、光君ばりの気に入らない言い草だ。

とて、涙の落つるを紛らはいたまへるけしき(涙が落ちるのを隠そうと為さる様子が)、いみじうあはれなるに(何ともいじらしくて)、宮は、いとどほろほろと泣きたまひて、

「母にも後るる人は(母親に先立たれた人は)、ほどほどにつけて(それぞれの事情によって)、さのみこそあはれなれど(色々な面で不憫ではあっても)、おのづから宿世宿世に(やがては宿命に応じて)、人と成りたちぬれば(成人してしまえば)、おろかに思ふもなきわざなるを(馬鹿にする者もいなくなるので)、思ひ入れぬさまにてもものしたまへ(思い詰めないように為されませ)。

故大臣の今しばしだにものしたまへかし(御祖父様がもう少し生きていて下さればねえ)。限りなき蔭には(源氏大臣も実の父親なのだから親身の後ろ盾には)、同じことと頼みきこゆれど(故大臣と変わらないように期待申しますのに)、思ふにかなはぬことの多かるかな(思い通りには行かない事が多いのですね)。

内大臣の心ばへも(内大臣の御気質も)、なべての人にはあらずと(普通の人より優れていると)、世人もめで言ふなれど(世間の人褒めて言うようですが)、昔に変わるのみまさりゆくに(以前とは違う考え方ばかりに変わってしまった)、命長さも恨めしきに(長生きしてもつまらな

い気がしますのに)、生ひ先遠き人さへ(貴方のように将来のある人さえ)、かくいささかにも(そのように少しの事でも)、世を*思ひしめりたまへれば(世の中を悲観なさるのでは)、いとなむよろづ恨めしき世なる(つくづく全てが厭になる人生です)」 *「思ひ湿る」は<思い沈む>。

とて、泣きおはします(泣いていらっしゃいます)。